

V12

幼児が遊びの中で考えたり工夫したりする力を育てる指導のあり方に関する一考察

山口 茂嘉（岡山大学） ○門松 良子（岡山市立芥子山幼稚園）

研究の目的

幼児は遊びの中でたくさんのことを学んでいる。教師が遊びを与え教師の計画どおりに遊ばせるのではなく、遊びの中で幼児がもっている旺盛な好奇心を発揮させ、いかに多くのことを自分自身で学ばせるかがこれからの課題である。幼児の旺盛な知的好奇心や向上心に答える形での知的教育が必要であり、問題はその教育の内容・方法であると言われている（波多野・稲垣、1973）。そこで、幼児が遊びの中で考えたり工夫したりして多くのことを学んでいくためには何が必要なのかシャボン玉遊びの2年間の実践をとおして検討する。そして、幼児が遊びの中で考えたり、工夫したりする力を育てるための指導のあり方について考察を加える。

研究の方法

対象児 岡山市立S幼稚園（2年保育）に在籍する

M児

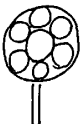
記録法 場面見本法によるビデオ録画

期 日 平成10年6月、平成11年6月

結 果

実践例1 M児(4歳時)のシャボン玉遊びの取り組み

日	遊びの実態	
12日	- M児が容器に石鹼を溶かしストローを持って来てテラスでシャボン玉を始めた。他の幼児も同じ場で一緒にストローで吹いている。 - ストローを4本束ねて吹く。M児のシャボン玉ができたので他児が「どうしてMちゃんだけできるんだろう？」と驚くと「4本、4本」とストロー4本で吹き、「神様が私に魔法かけちゃった」と言う。 - テラスで吹いていたが高い遊具の上に上がって吹く。	
16日	- プラスチックの糸巻きで吹く。中をのぞいて膜が張っているのを確かめてから吹く。できたシャボン玉を手で取ろうとする。 - 曲がったストローを使って吹くのではなく、曲がったところに膜を作って吹こうとする。 - プラスチックの小さい輪で吹く。 - ストローを折り曲げ三角にして吹いたり、手で持って回ったりする。 - ストローを折り曲げて自分の方に吹き出し口を向け、自分に向かってシャボン玉ができるように工夫する。	
17日	右手の指を輪にして吹く。輪にした指を体の周りで回す。	

	・両手の指で輪を作って吹く。	
18日	・紙の筒を持ってぐるぐる回る。筒をしっかりと液につけて膜を張ろうとする。	
25日	- プラスチックの輪（小さい輪が繋がったもの）を持って体の周りで大きく振る。 - プラスチックの大きな輪を持ってそっと回る、吹く、上から下に動かすなどいろいろ試す。 - ペチュニアの花で吹く。「やっぱりできた」と納得する。友達ができないのを見て「穴が開いてないからよ。一緒に探してあげる」と花を探しに行く。ペチュニアの花を取って来て吹いてみる。「やっぱりできた」と言う。 「これじゃできるかな？」とそばに咲いていた朝顔の花を取って吹いてみる。「できた」と満足する。	  

M児が手洗いに置いていた石鹼で石鹼液を作りシャボン玉を始めた。それを見た他の幼児がそれぞれストローを持って来て一緒に遊びだした。一つの容器の液をみんなで使い頭を寄せ合って遊んでいたのも子ども達がどのように遊びを進めていくか見守った。ここでM児のシャボン玉がよく膨れるのは「ストローが4本」「神様が私に魔法をかけた」などと友達に話した。翌日からみんながシャボン玉遊びに興味をもったが、シャボン玉が膨れないと遊びをすぐに止める様子が見られたので、よく膨れるシャボン玉液を教師が作り遊びの場を設定した。そこで、M児を中心にして遊びが展開された。シャボン玉ができるには膜が張っていないといけないことに気付きそれを確かめながら吹いていた。また、ストローのように筒状になっていなくても膜が張ればシャボン玉ができるのではないかと考えて、曲がったストローを工夫して使ったり、膜を張るためにストローを三角にしたり、手の指を輪にしたりなどいろいろな物で膜を張ってシャボン玉を作っていた。また、口で吹くだけでなく膜が張っている物を空中で動かすと膨れるのではないかと考えて、三角にしたストローや輪にした指を動かしたり、長い筒を手を持って回ったりしてシャボン玉を作っていた。吹く息の出る方にシャボン玉ができると考えてストローの吹き出し口を自分の方に向けて吹くなど自分で考えたことを試している様子が見られた。また、プラスチックの輪を動かす速さや方向をいろいろ変えてみたりしながら試していた。花をストローのようにして吹いていたが、

友達がうまくできないのは、吹くところに穴が開いていないからだと考え、穴が開いている花を探して来て「やっぱり、できた」と自分で確かめていた。また、違う花でも試していた。

実践例2 M児(5歳時)のシャボン玉遊びの取り組み

日	遊びの実態	
15日	・手に液を付けてストローでシャボン玉を手のひらの上で膨らす。「よし、できた」と言う。 ・手のひらの上にシャボン玉を作りその中にストローをさして中にもシャボン玉を作り二重にする。 ・手にしっかりと液を付けて左右の指で輪を二つ作り吹く。両手の指で大きな輪を作る。左右の指先を付け指の間を開けて吹く。	 
18日	・プラスチックの大きな輪に膜を張り手に液を付けて膜の中に手を入れる。腕の方までしっかりと液を塗って腕まで入れる。「魔法の鏡」と言う。 ・五本の指を膜の中に入れて動かし、膜を壊さないように指を抜く。	
19日	・プラスチックの輪を二つ重ねて吹く。 ・他の幼児とプラスチックの輪を持って向き合い二つ重ねて吹く。二つの膜がくっついたのをそっと引っ張る。 ・友達の輪と交差して重ね、膜が張っているところを吹く。	 

5歳になるとシャボン玉を膨らますより、シャボン玉液でいろいろなことを試している様子が見られた。手にシャボン玉液が付いていると手のひらの上でもシャボン玉が壊れないでできることが分かり、手のひらの上で作ったり、その中にもう一つ作ろうとしたりしていた。また、手の指をいろいろな形にして吹いてみたりなど、自分なりに考えたことを確かめている姿が見られた。プラスチックの輪に膜が張った物を「魔法の鏡」と言って膜の中に手を入れても膜が壊れないようにシャボン玉液を手にとしっかりと塗り付けていた。また、プラスチックの輪を二つ重ねて吹いてみたり、交差させて吹いたりなど考えたことを友達と一緒に試していた。M児が考えたことが他の幼児にも広がり他の幼児も自分なりに考えていろいろな方法でシャボン玉遊びが展開された。

考 察

M児の2年間のシャボン玉遊びの取り組みを見ると4歳の時にはシャボン玉を膨らすことに興味をもち、いろいろな方法を考えてシャボン玉を作っていた。そして、その経験を基に5歳になってからは、シャボン

玉を膨らますだけでなくシャボン玉液を使ってさまざまな遊びを創り出し、新たに自分で考えたことを試したり、いろいろ工夫したりしている様子が見られた。そして、M児が発見したことが他の幼児にも広がり、他の幼児も自分なりに考えて遊ぶようになってきた。2年間のシャボン玉遊びの中で考えたり工夫したりすることをとおしてM児の中に多くの学びを見ることができた。

子ども達が「おもしろそうだな」「どうなるかな」など好奇心を示した時に、自分で納得いくまで、考えたり、工夫したり、試したりしながら十分かわることができるよう遊びの環境と子どもにとって自由が許されていることが必要である。しかし、遊びの環境と自由があるだけでは子ども達の好奇心は達成されるものではない。そこでの教師のかかわりが大きく影響すると考えられる。幼稚園の中で様々な遊びが展開されているが、一つ一つの遊びの中で教師は常に幼児の遊びを見ながら、環境をどうするか、今必要としているものは何か、何を学んでいるのか、次の課題は何かを瞬時に判断し適切に対応していくことが必要になってくる。シャボン玉遊びも環境を設定しておくだけではなく、どのような用具をいつ用意するか、シャボン玉液をどうするか、子どもが今何に興味をもっているかなど常に子どもの遊びの実態を見ながら子どもの好奇心を持続させ、より多くのことを学んでいけるような教師のかかわりが大切になってくる。太田(1999)は『『おもしろかった』『もっとやりたい』という達成感と意欲は、もっと自分でなんとかしてみたい、自分の力を試してみたいという自分自身に対する関心、好奇心を生み、より高い達成感へつながら」と指摘している。幼児の好奇心をより高い達成感へとつないでいくためには、教師は一つ一つの遊びの中で、何が育っていくのか遊びの理解が必要であり、特に5歳児の知的好奇心を満足させるためには、教師自身も強い好奇心を常にもつことが大切である。そして、子ども達の考えたこと工夫したことや分かったことを認めたり、一緒に考えたり、子ども同士の相互交渉を促したりしながら、考えることの楽しさ、分かることのおもしろさを体験させることが必要である。そして、遊びをとおしていかにより多くのことを子ども達自身で学ばせるかなど、子どもの考えたり工夫したりする力を育てることになると考えられる。

参考文献

- 波多野誼余夫・稲垣佳世子 1973 知的好奇心、中公新書
太田光洋 1999 保育で大切なこと、ジオ・プレス